

遠心処理後に測定する HbA1c 測定法での採血管の取扱い(EDTA入り採血管推奨)について

HbA1c の測定法は、全血試料をそのまま用いる測定法（HPLC 法、アフィニティ法、免疫阻害法、免疫法の一部および酵素法の一部）と、一度採血管を遠心し、その赤血球層を用いる測定法（HPLC 法の一部、免疫法の一部および酵素法の一部）があります。

後者の採血管を遠心しその赤血球層を用いる測定法の場合、全血の検体を長時間冷蔵保存し、搬送した場合に、赤血球が溶血し HbA1c が低値になることが報告されました。これは老化した赤血球ほど溶血しやすいためと考えられます。従って、HbA1c の測定を外部の検査機関に委託する場合など、全血の検体を冷蔵、運搬、保存し、赤血球層で HbA1c を測定する場合は、溶血の影響を受けにくい **EDTA 採血管**を使用することを推奨します。また、血糖検査用の NaF 入り採血管の使用は望ましくありません。

なお、全血試料をそのまま用いる測定法では採血管による差はほとんどなく、この限りではありません。

医療従事者の皆様におかれましては、HbA1c 測定に際し本連絡に沿った対応をお願いいたします。

文献 [糖尿病 64 \(5\) : 336~339, 2021](#)

2021 年 7 月 15 日

日本糖尿病学会
理事長 植木浩二郎
糖尿病関連検査の標準化に関する委員会
委員長 西尾善彦

日本臨床検査医学会
理事長 村上正巳

日本臨床化学会
理事長 三井田孝